



ビブリオバトル 交流戦を今年も 開催します

中央図書館では、都立砂川高校との共催により、市内中・高校生が発表者となって「ビブリオバトル」を開催しています。

ビブリオバトルとは、「知的書評合戦」とも呼ばれています。「バトル」と呼ばれる発表者が、読んでおもしろいと思った本を紹介し合い、観覧者を含めた全員でディスカッションします。最後に「どの本が一番読みたくなったか」を投票して、チャンプ本を決めるというコミュニケーションゲームです。発表者だけでなく観覧者も投票に参加できる楽しいイベントで、今回で7回目になります。今年は3月26日(休)午前10時から中央図書館4階会議室にて開催します。市内在住・在学の中学生・高校生の皆さん、ぜひご参加ください。

申込は2月15日(土)までに直接または電話で中央図書館☎(528)6800へ。



立川の教育がここに集結！ 「立川教育フォーラム」を開催！ ～立川っ子の活動を見て！聞いて！～

今年のテーマは「つながり」。地域や国を超えた人とのつながり、伝統や文化を大切にする時のつながり、過去から未来へのつながり。立川市の学校の取組や小中学生に関わりのある事業報告などを3部構成でお届けします。発表から司会・進行まで児童・生徒が主役です。さらに、特別講演では、国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官・志々田まなみ先生を講師にお招きして、本市で進めている「地域と共にある学校」についてお話を伺います。今回も盛りだくさんの内容です。ぜひ会場へお越しください。



図指導課・内線2498

- 日時** 令和2年2月15日(土)午後1時～4時20分(受付午後0時30分～)
- 会場** たましんRISURUホール(立川市市民会館)大ホール
- テーマ** 人がつながり、時がつながり、そして未来へ
- 内容** 【第一部】●サンバーナディノ市派遣報告 ●児童会・生徒会サミット報告
【第二部】●九小「味噌づくり」 ●立川第一中「狂言・落語」 ●五小「合唱」
【第三部】●広島派遣事業報告 ●若葉台小「合唱」 ●一小「150周年発表」
- 講演** 演題：「地域と共にある学校」
講師：国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官 志々田まなみ先生

講師プロフィール 志々田まなみ先生



広島大学大学院教育学研究科修了後、広島経済大学教授を経て、2017年4月より現職。2018年4月より杉並区立三谷小学校学校運営協議会委員。2015年より広島県教育委員。専門分野は生涯学習論、社会教育学。とくに、学校・家庭・地域の連携・協働に関心を持ち、公民館や地域学校協働本部、コミュニティ・スクールを対象とした地域学校協働活動に関する全国調査を実施してきた。

「立川教育フォーラム」とは？

教育の充実と推進を図るために、保護者、市民、教職員が一堂に会した場で、教育実践等を紹介する会。平成16年度から今年度で16回目を迎えました。学校教育を通して、よりよい社会をつくるために、私たちがすべきことは何か、フォーラムを通じて、共に考えましょう。

今年度は第一小学校開校150周年の記念すべき年にあたります。同校は都内で一番古い小学校であり、立川の近代教育の原点といっても過言ではありません(ただし、開校時、多摩地区は神奈川県に属していました)。では、第一小学校ができるまでの立川での教育がどのようなものだったのかはご存じでしょうか。

江戸時代において、武士の教育が藩校などで行われたのに対し、庶民の教育は寺子屋で行われていました。時期や地方により差異はありますが、一般的に寺子屋での教育は、商品経済の発達に対応した、「読み書き算盤」(読み方・習字・算術)などが中心でした。

現在の立川市域でも、いくつもの寺子屋が存在していたことが数々の資料からわかっています。市の北部・旧砂川村地域は、江戸時代末期には養蚕業で隆盛をきわめ、絹織物の商品生産が行われていたことから、教育への熱も高かったことは想像に難くありません。阿豆佐味天神社宮崎若狭によって境内地に寺子屋が開かれていました。一方、市の南部・旧柴崎村地域には、諏訪神社の宮本塾、井上富右衛門の寺子屋、普濟寺の心源庵の三か所があったことが、これまでの研究から明らかになっています。それぞれの寺子屋の開設時期は明確ではありませんが、宮本塾は天明三(一七八三)年、井上富右衛門の寺子屋は文化・文政期(一八〇四～一八三〇)には開設されており、普濟寺心源庵は天保期(安政期(一八三〇～一八六〇)には確実に寺子屋活



明治37年ごろの立川村尋常高等小学校(現第一小学校、馬場吉蔵「立川村十二景」より)

立川市の
歴史と
文化財
41

立川近代教育の礎 — 第一小学校ができるまで —

動を行っていたといえます(ちなみに普濟寺心源庵については、享保二(一七二七)年の「普濟寺境内並堂塔図」には、図中北東側に「学舎心源庵」と書かれた建物が描かれていますが、その時すでに寺子屋として使用されていたのかは定かではありません)。これらの寺子屋は、相互補完の関係にあり、特に普濟寺心源庵と諏訪神社宮本塾間では「読書進修承候に付、宮本江相頼、今日寺下り降りかけ毎日素説為致候事」など、学習の発達段階に応じてそれぞれ寺子(筆子)が通い分けていた様子が、鈴木家文書「公私日記」には記されています。江戸時代後期には、地域的に極めて高い教育水準が醸成されていたといえるでしょう。

明治維新期においては、近代国家建設の基礎として国民一般の教育が重視されました。日本の近代初等教育の構想は、明治二(一八六九)年二月に明治新政府による府県への施政方針を示した「府県施設順序」において「小学校ヲ設ル事」と示したところから始まります。各藩や府県の地元有志らによって、時代の動向にこたえようと「郷学校」を設立する動きが出てきます。立川市域ではまずはじめに、柴崎村で明治三年に普濟寺心源庵を教場として、現在の第一小学校の前身となる郷学校が開設されました。教師は柴崎村の板谷元右衛門、板谷良作、白川至敬、柳生樺軒の四人が務め、生徒は四十人ほどで、授業内容は寺子屋とあまり変わらない「読み書き算盤」であったといえます。明治五年には学制が公布され、柴崎村の郷学校は「郷学舎」と名を改めて公立学校として設備を整えました。

画像は明治三十七(一九〇四)年ごろの立川村尋常高等小学校(柴崎村は明治十四年に立川村に改称、現第一小学校を描いたものです。この市指定有形文化財「立川村十二景」の作者・馬場吉蔵も同校生徒で、のちに代用教員として勤務していたといえます。

歴史民俗資料館☎(525)0860